浪花
祿誌

街廼噂

冬

208
4
93

国立国会図書館　街能噂 4巻 208-93

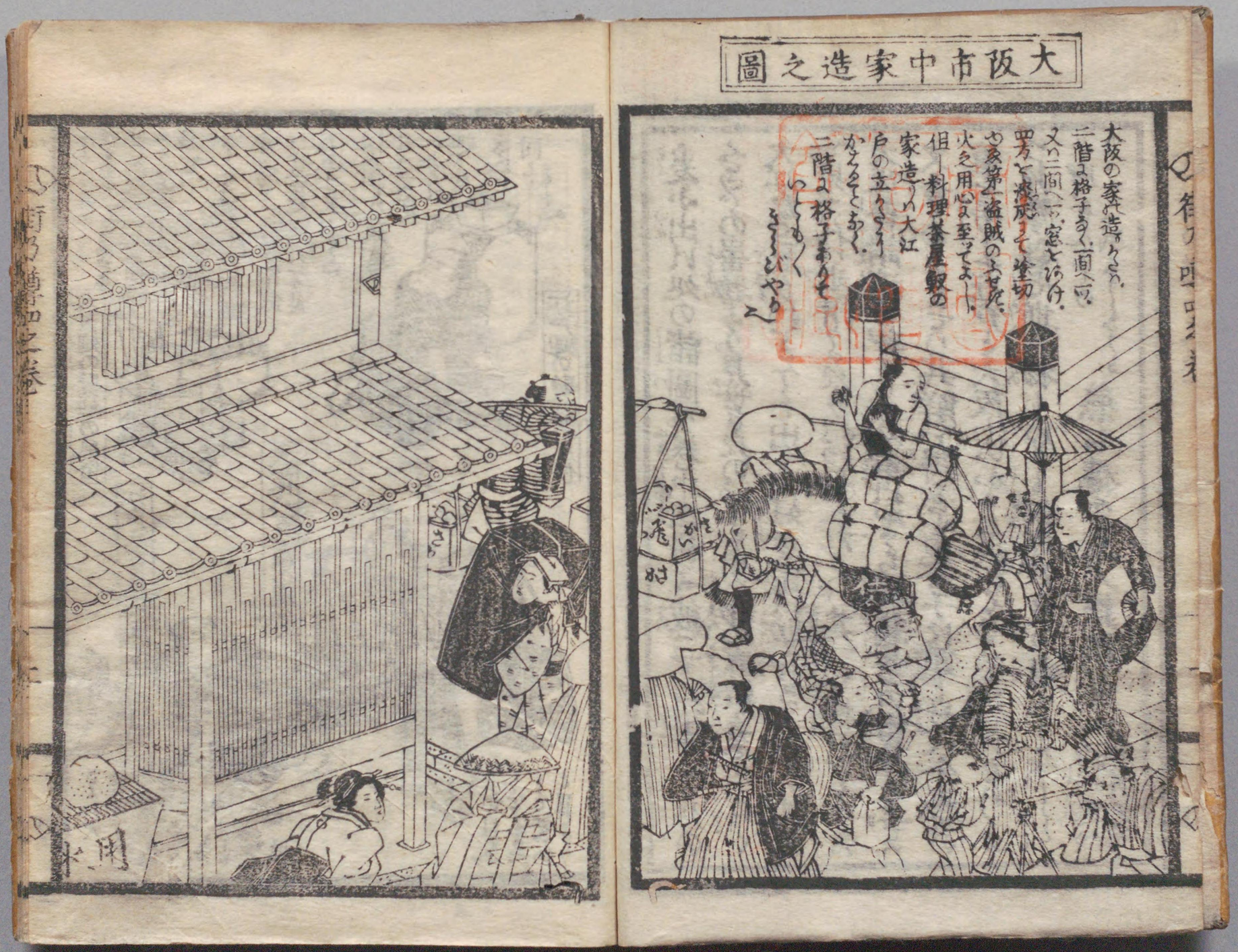
ガラス使用

爰ふ出し処の諸圖ハ巻中三冊ゑ彼三子ハ論ずる処の
くさぐさの器物より見世さるものゆりさる人物の風俗ゑ至て悉く
大江戸と異りたるこゝ出して好事家の助となるべしこれ其図
と見ざれハ氷解ぐるがりたるこれ見だるべしたとへハ其一二を摘ていそんまれ
大阪普請場の印ゆりべカ車ハかゝら針箱等の製作ゑ至ていい
文章どりなてい其解と得ざるべ兒女子に遲し故に今画工の
筆と労して江戸と大阪とのかゝらハかたりる品ハそれくゑ
つくるとせて斯ハ物しるも例の好事の癖なるべしと。

御ぞんじの
我まゝなる　燕石樓の主人銀鷄ぐふ

国立国会図書館　街能噂 4巻 208-93

ガラス使用

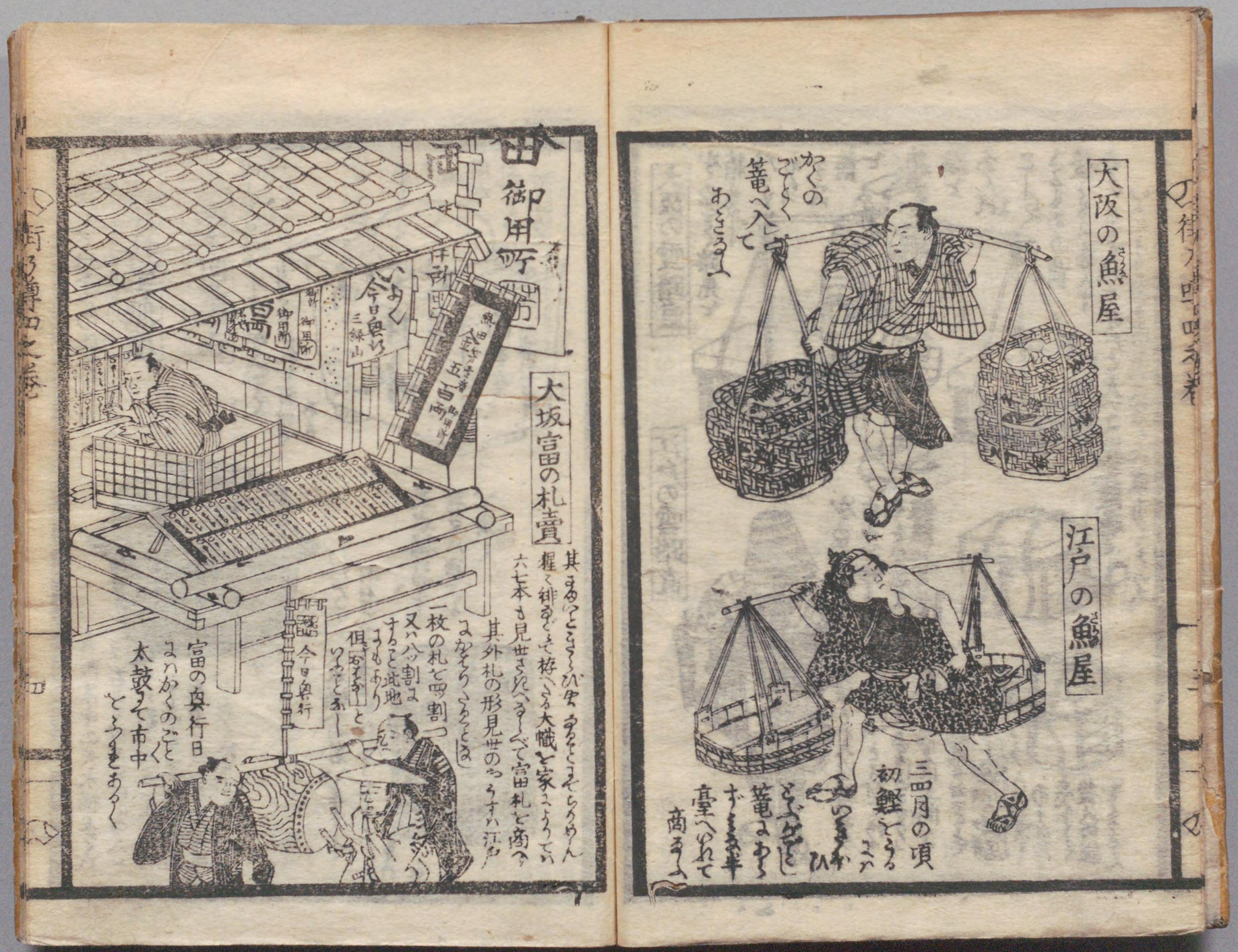


国立国会図書館　街能噂 4巻 208-93

ガラス使用

国立国会図書館　街能噂 4巻 208-93

ガラス使用



国立国会図書館　街能噂 4巻 208-93

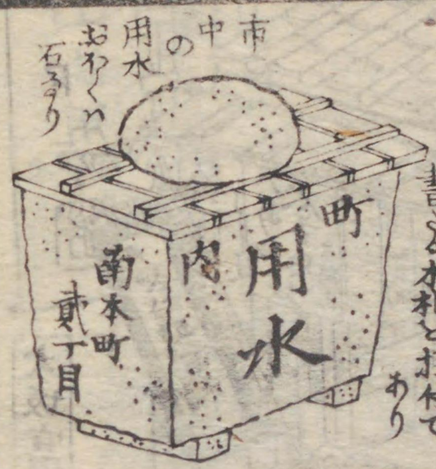
ガラス使用

大阪町くさ水戸の張札

張札堅無用

南本町貳丁目

町くの入口の大木戸などに書る木札と打付てあり



大阪市中の天水桶多くハ石ゝて作る又町くの入口ゝハ別ゝ町名ときり付る四角なる大石の用水あり或ハ大釜を出しおく処もあり

江戸ゝてハ天水桶へ町名ゝまゝゝて打付ておく木戸の柱へうちゝるハまれ

天水桶ハ四斗樽又ハ油ゝるを用ゝ

江戸の放龜

胴中ゝ糸ゝてあぶりつるおくゝを図のごとく何もゝる橋の上ゝて商へゝ

大阪の放龜

竹の筒ゝ切て其上へのせおくゝを図のごとく

鱧も

此魚大阪ゝて至ゝ珍重せり吸物又ハやき肴ゝ用ゝ鱧の骨切と云製表

方言今ハよまさかやぞこゝ和も製せり江戸ゝて通ゝてハ鯛鮃と共ゝ多くゝ製せて

鮫を用其好ゝ至ゝてハ鯛鮃のかわりゝ通

江戸通用の吸物椀

椀ゝ同く大ぶりゝて深くゝ塗り色内外あゝしい朱ゝて

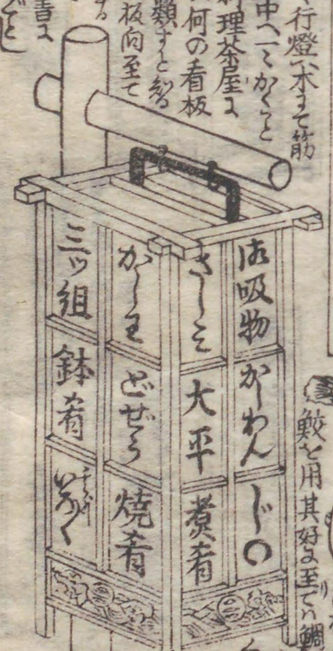
菓子椀

ゝる料理種いろゝゝあれども先ハ切蒸かまぼこ、あぶり、椎茸、松茸、麩、ゆば、菜ぜんの類ゝ江戸の大平の種と同ト

本書ゝ

大坂常の料理茶屋の行燈

かゝの如く行燈ゝ木ゝて筋ゝて其中へゝかくゝとすゝて料理茶屋ゝかゝゝゝ何の看板も是ゝ類すゝと多くべゝ看板向至ゝてきれいなること



国立国会図書館　街能噂 4巻 208-93

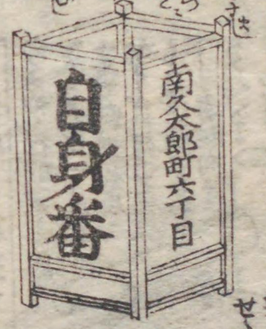
ガラス使用

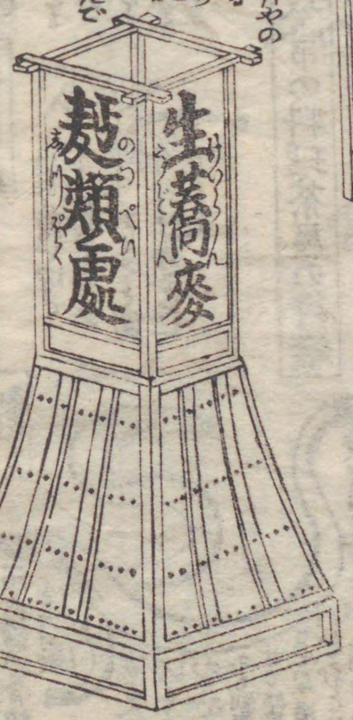
一かちん　代二十四文

一ぞうに　代三十八文

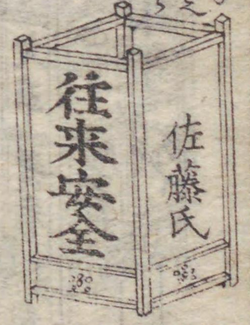
一うどん　代十六文
一そば　代十六文
一のりぺい　代廿四文
一ひんなみ　代十八文
一けんちん　代廿四文
一すいもの　代十六文
一上酒　代廿四文

自身番氏行燈





大阪蕎麦屋の行燈



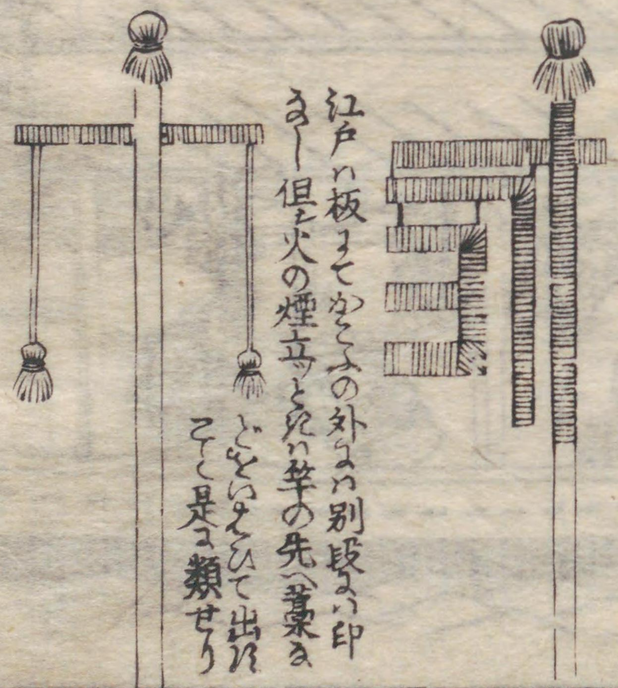
大阪市中の掛行燈

大阪御法度書

御法度
一喫煙連縄
一喫煙すべからず

御法度
一ろくでなしあるいは
辻客引
及中双六
一御用の法度勝負

大阪普請場の印



江戸の板まとかこの外の別段の印
なり　但し火の煙立つ所の竿の先に藁を
どをいとひて出
こと是に類せり

国立国会図書館　街能噂 4巻 208-93

ガラス使用

大阪船鮒之図

船生洲と云へるところ地の名物中にて図の如き舟を水中に浮べ船中を二五三五位に幾つとなく仕切て客をもてなす大きなる手を四方へ幕をとり料理を船中にて調味して出せり炎天の納涼ところ夕暮の汗をぬぐふ夫舟は多くは白いそんやこの舟に数さへ藝子をつれてこの遊びをいとなむ人これが男ごころの青人草の心の駒の手綱をメて遊びのいとなみとぞ〜

舟の造りは江戸と異なり常の舟より縁を縁側ありて其上へのぼりて漕ぐ浅くして砂をとる場所あり波静かにして船中穏なれば酒宴を催すいとまあり

国立国会図書館　街能噂 4巻 208-93

ガラス使用

大坂軽車之圖

かくのごとく車の輪の
すじ〳〵先と二人
彌ゝてひくこゝ跡と縫木
の中〳〵るりのまゝ押れ
ばもあり江戸のごとく
梶ごゝ
ゑど
すゝ
ること
なく

江戸の代八車

車の造りこと大坂とハ
異なり輪のすじ
圍りそまゝ貫
至りて四人にて押し軽
三人にて引
車力の
ゑゝ
ごゝ

国立国会図書館　街能噂 4巻 208-93
ガラス使用

上器へ食物を入て商ふ図

上器へいろ〳〵なる食物を盛て見世さきへならべおくこと左のごとし

三文　二文　四文

大阪の米屋の見世はいろ〳〵なる米を半切へ入てかくのごとく

丹波米　播州米　八十八文　九十四文　九十文

直段付の札は黒ぬりの札へごふんとてかく

大坂米屋之札

大阪の針箱

江戸とは其製大に異なり図のごとく針さしは別段に棒を立て其上にあり

針箱のぬりは黒春慶ろぬり又は焼相

等なり木地の色はあらはれて

図のごとくにして針指をつけておくなり

塗は木地の色を至りて焼杉春慶もあり

大阪にては正月の重詰は海山といふことあり海といふは魚類にて山といふは精進のことなれども別に海山とつけておくなり

江戸の針箱

国立国会図書館　街能噂 4巻 208-93

ガラス使用

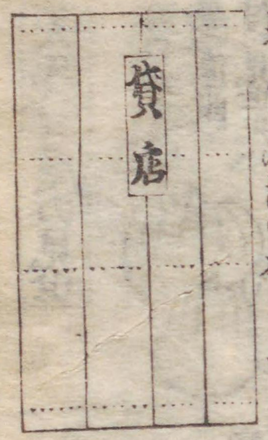
大阪夜中時廻の図

十八阪にて夜のとぶと知らするは大鼓にて廻る其図かくのごと此大鼓の役は自身番よりのさーづすして日雇と出れ申り但し大阪にて番太とは江戸の八十里のさぐれ

江戸夜中時廻の図

江戸にて夜の時は拍子木にて廻るすると図のごとし但一町くゝに番太郎とゝるものありて町役とつとむ此拍子木も此者の役に其外町内に非常のことゝなれば皆番太郎がうちたゝく

大阪にてはかくのごとく貸店のたり札とまぎらはる習ひに徳利にはる名酒の札も同じくまぎらはるゝ



江戸にてはかくのごとく直またり来まり名酒の札も直またる

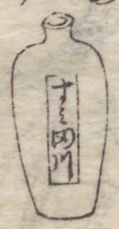
車止

大阪車止之札

かくのごとく制札の体裁に同じ留の字多く止の字となり

○大阪名酒の札のたりゆう

○江戸名酒の札のたりゆう



江戸車留之札

諸用之外車留

かくのごとく記して往来の真中に立る歩の字書さるハ皆留の字なり

大阪八百屋の見世

図の如く品物へ直段を付て見世先へ列べおく

十二文

南番瓜

ちりめんの浪花そいなんとよべり

廿四文

十六文

胡瓜

きうりの形江戸より細長くして風味至りてよし

ぜんごんもづみどりの茎の長さ一尺五寸より二尺あまりよべり

大根ハ江戸の蕪のごとくにつゞみどりなり

茄子ハ長なすびなどいへるけれども江戸の茄子のごとく丸くこいまれなり

大阪なすのくさくさをおとのふりのけり其くさくさら豆のごとくにして風味至りてはしこい江戸まんざるのめくさりくさと村といふ処より出づるはこの大阪より三里ばかり北へ

江戸の大こん

太くして長し大阪のごとくなるべく短るいなり

江戸のぜんごん

かくのごとく長くして茎も色

国立国会図書館　街能噂 4巻 208-93

ガラス使用

国立国会図書館　街能噂 4巻 208-93
ガラス使用

大阪の漆うるさ

大阪にて立て居てかき
まはしをり江戸へ坐して
居て杉子けせうをるうち
そ煙ここへ益
るがことをるう
風俗のうるさ
いとんとうも
出れ

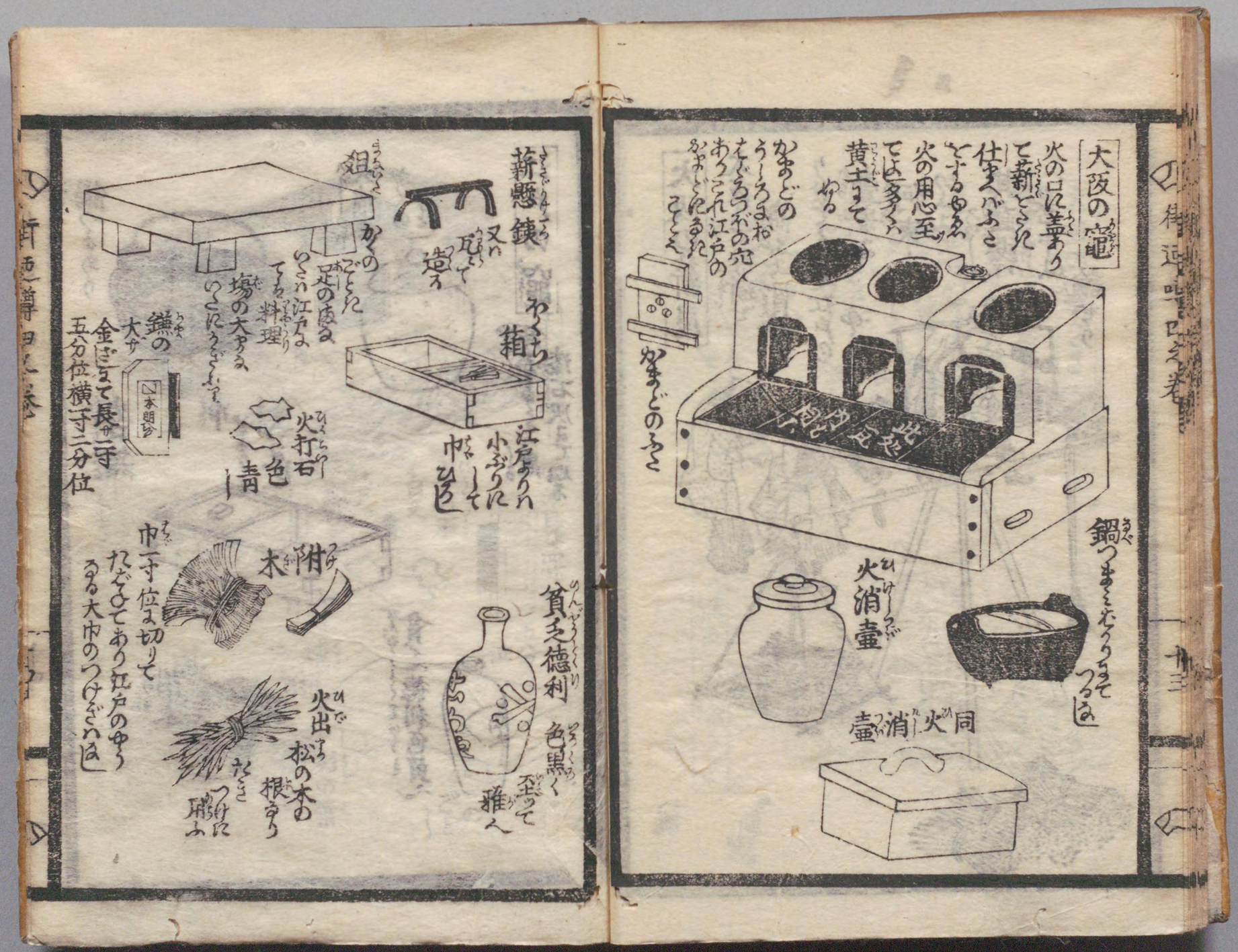
江戸の漆うるさ

大阪の薪屋

大阪にて薪を
商ふを貫目を
うけてうるを江戸の
壹歩を
何束と
いふなてい
其直段い
巻中を
論ぜり

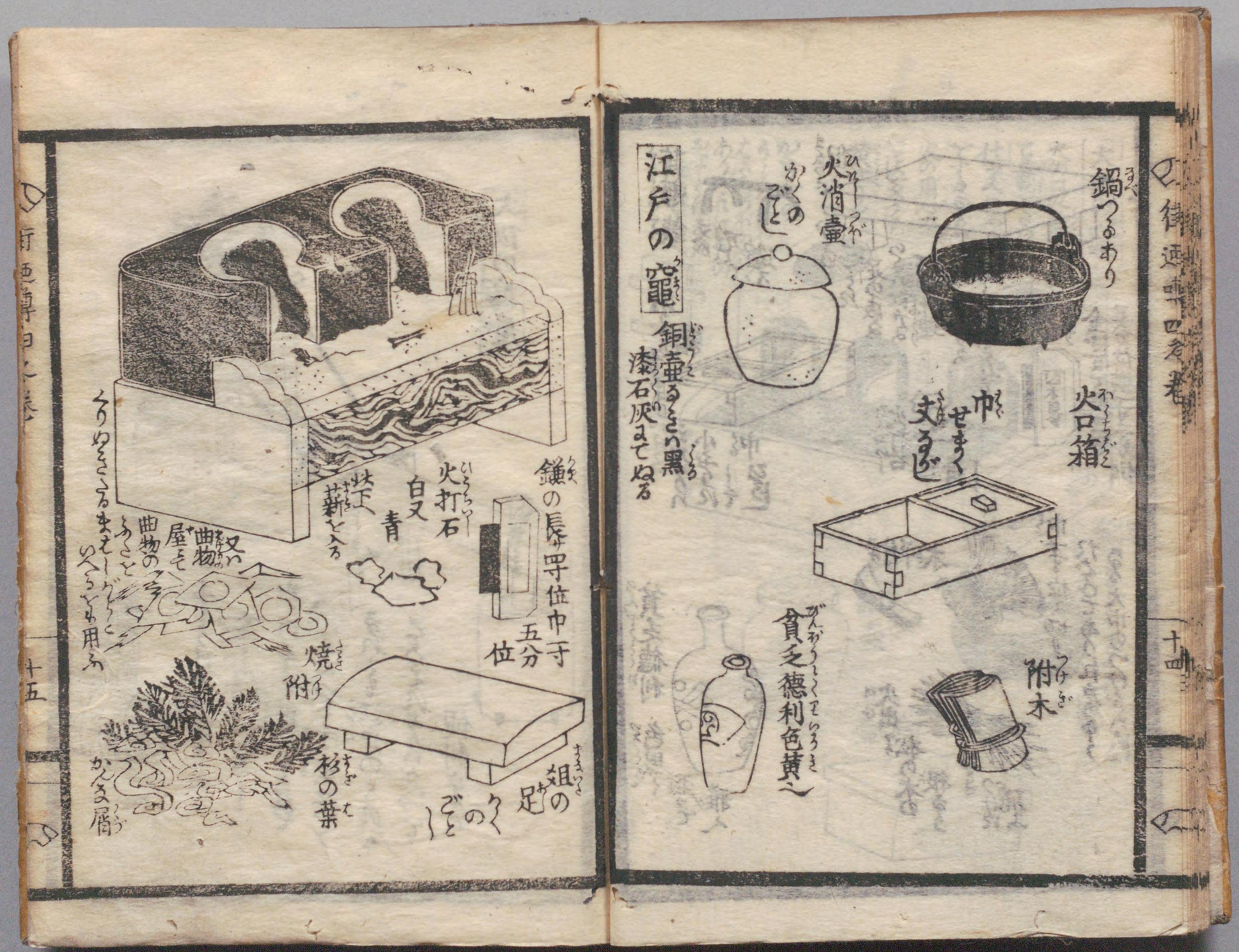
国立国会図書館　街能噂 4巻 208-93

ガラス使用



国立国会図書館　街能噂 4巻 208-93

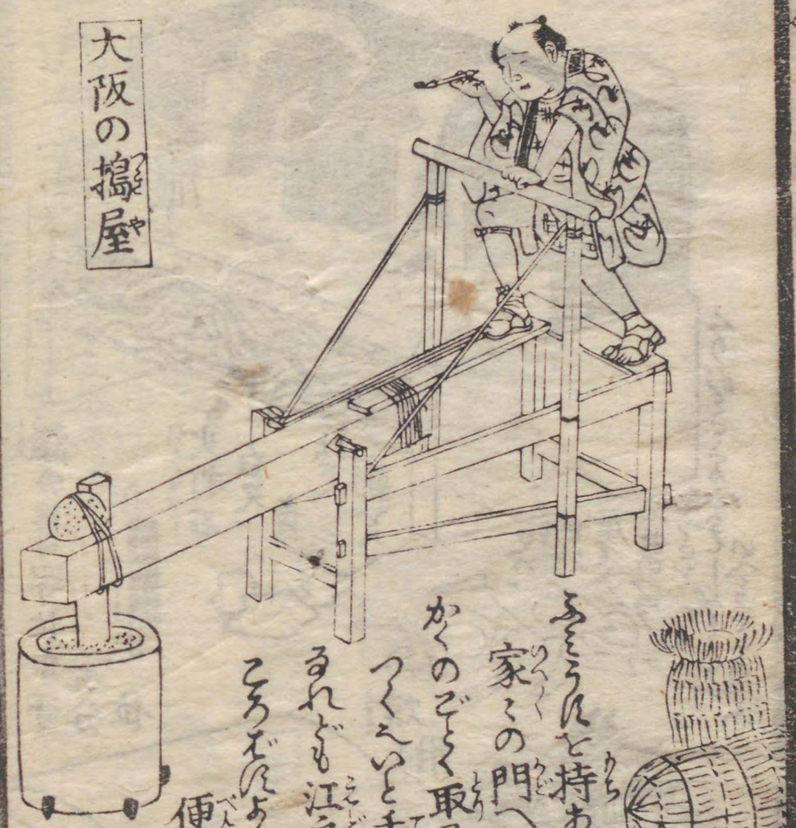
ガラス使用



国立国会図書館　街能噂 4巻 208-93

ガラス使用

大阪の搗屋



ふくろを持あるきて
家々の門へおろし
かくのごとく取こらひて
つくゑいと手重なり
されども江戸のうるを
こゝろむるよりはつて
便利なり

江戸の搗屋

きぐつつきとそかくの如き
きねをて搗これい江戸
の名物すて其さま頗る
いきわいわり力をくてい
るーぐるに業なり

国立国会図書館　街能噂 4巻 208-93

ガラス使用

銀鷄先生浪花旅宿中著述目録

浪花雜誌 **街廼噂** 初編 四冊

此書ハ江戸と大阪と風土おのづからちがひ
ありて、変ぜるを論じ、
書あり。好事家坐右において
益多し

廓中奇談 **浪花ゆめ** 初編 三冊

此書ハ新町廓中の名所をあらそひて起し、末ハ
くさぐさの趣向ありて、古今未曾
有の工夫なり

至昔今惡滑稽 **酒取物語** 全二冊

此書ハ竹取物がたりの体
裁をかりて、
おどけ本なり

豐年雜記 全一冊

此書ハ日毎の心得、御代の宝の三篇
目ふ〜く、饑饉に手あてすべき物の
せんさくを精く記したるまぶ書

国立国会図書館　街能噂 4巻 208-93
ガラス使用

208
4
93

飛花落葉 全一冊

此書ハ風來山人の狂文を蜀山人の輯めあつめ書るれどいとこまるに付く板本稀く今古写本とえてそれと校合を加て再板

難波廼花 全一冊

此書ハ大阪の戯作者と浮世絵師との姓名住居とあるし并ハ傳をくわ

書林

江戸通油町 鶴屋喜右衛門

京都寺町通御池上ル 鉛屋安兵衛

大阪心齋橋通唐物町 河内屋太助

国立国会図書館　街能噂 4巻 208-93

ガラス使用

国立国会図書館　街能噂 4巻 208-93

ガラス使用